

悠久録

竹之高地そばまつり

長岡市の東山山麓蓬平温泉から奥まった場所の竹之高地そばまつりに行って来た。ここは教員生活を途中でやめてこの地で紙漉きに専念した故原取刀利松さんの故郷である。原さんはその著書『神と仏と人と化けものの邑 たけんかうちの話』の刊行目前にして一昨年一月に他界された。その原さんのもとで和紙作りに携わってきた人に勧められたからである

かつてこの地は家の数 60 世帯で小学校もあったのに、今は定住している家は一軒のみで、このそば祭りに参加している人たちはすべてここに住んでおらず、近隣から通ってきて耕作しているという。その昔戦いに敗れた武将原美濃守がこの地を開き、ここの姓はすべて原であるとか

集落入り口の不動社社務所前のテントでおいしい蕎麦をいただいた。集落中央に4階建ての「竹山館」という建物があり、ここに絵や太田小中学校の子供たちの俳句が展示されてあった。原さんが「しと絵」と呼ぶ和紙の絵も飾ってあった。原さんは本のあとがきに

「人々は今地域の活性化と称しながら、実は一方的に利用することしか考えていないようである。百年の計を考えるなら、人と山とは互いに利益を与えあって生きる。つまり共生する方向を目指す必要がある。そこで、かつてムラの原型であった『邑』を思い起こしてみたい。そこでは山々の木を育て、無理のない開墾をし、田や畑を耕し、水を管理してきた豊かといえないが、大自然に溶け込んだ心豊かな生活があった」という。これが原さんの理想であった。

(ひこぜん)